

「在外研修の報告」

稲 賀 繁 美

十九世紀フランスの美術の北米における受容、およびその

日本・東アジアの場合との比較研究という名目で、十ヶ月の在外研修の機会を得た。最初の滞在地ニューヨークではコロンビア大学東アジア言語文化学部へのンリー・スミス先生に受け入れ責任者をお願いして、半年間を過ごした。こうしてようやくメトロポリタン美術館資料室での調査の機会に恵まれた。メトロポリタンの近代絵画収集の基礎をなすハヴァーマイヤー・コレクション形成に関しては、すでに館員の手によって *Splendid Legacy The Havermeyer Collection* (1989), *Louise W. Havermeyer, Sixteen to Sixty, Memories of a Collector* (1961) ほかの基礎資料が公開されている。そこには、写実主義から印象派以降の世代のフランス画家の作品が、大西洋を横断して、新たな価値観を新大陸に植え付けるとともに、逆にヨーロッパの市場での作品評価額の高騰に、多大な影響を与えた様子が浮き彫りにされている。とはいえ作品購入に関する一次史料は、なお一部を除いて公表は控えられており、特別許可を得て鉛筆でメモを取った。そこから、例えばデュランリユエル画廊が、パリとニューヨークとの商取引を、作品評価額吊り上げの手段として有効に利用した実態が明るみに出る。大西洋を越えるだけで、マネの幾つかの作品の価格などには、最低二倍、場合によっては一

桁分の価格吊り上げが発生しているのだ。またピアボン・モルガン図書館、メトロポリタン美術館専門図書館などでは、関係者の書簡などの未公刊手稿を検索できた。とりわけホイスラーのテオドル・デュレ宛未公刊書簡からは、画家と収集家のあいだの交友の細部が復元された。これは今後所蔵者の許可が得られれば、どこかできちんと刊行したいと思っている。さらにホイスラーの作品をメトロポリタン美術館が購入する際に、デュレとの交渉の仲介役として、ブルムズベリー・グループの中心をなす美術批評家、ロジャー・フライの果たした役割なども明るみに出てきた。概略、一八八〇年代以降、フランスを中心とする美術動向がアングロ・サクソンの世界へ導入されることで、普遍的な価値観を認定され、あらたな国際的美術市場が形成されてゆく状況が浮かび上がってきた。

こうした近代美術観の浸透という状況のなかで、北米と東アジア、とりわけ日本との係わりを検討すると、写真派、印象派の移入に関して、注目すべき並行性が見えてくる。ここから黒田清輝や久米桂一郎のパリ留学を、ウィンスロー・ホーマーやジョン・ラファージのパリ留学と対比する視点が開けてくる。世界の西端たるアメリカと東端たる日本との対

比は、当時頻繁に開催された万国博覧会会場のパヴィリオンの配置（六七年パリ、七三年ヴィーン）にも反映していた。日本美術の近代化を志すとともに、東洋美術の神髄を西洋社会に伝えようとして、後半生をボストン美術館の東洋部で過ごした岡倉天心の位置も、こうした北米と極東との知的関心の交点として見れば、よりはっきりと理解されるだろう。

そもそも岡倉天心は、一九〇〇年のパリ万国博覧会のために準備された、最初の公式日本美術史、*Histoire de l'art du Japon* の編纂にも重責を担ったが、その延長線上にある『東洋の理想』（一九〇三）は、日本のみならず、植民地下のインドにおいて、近代国民意識の形成に関与した。天心がインドで肝胆あい照らす交友を得た宗教家ヴィヴェカーナンダ、また『東洋の理想』に序文を捧げたのみならず、全編に互って英文を斧正したシスター・ニヴェディータの役割など、日本ではまだ断片的にしか研究されていない。カリフォルニア大学ロスアンゼルス校のノートヘルファー教授からの招聘で、岡倉天心のワークショップに参加した際に、そのあたりの詳細を報告する機会も得た。『東洋の理想』が、エルネスト・ビンフィールド・ハウエルの *Indian Sculpture and Painting* (1908) や *The Ideals of Indian Art* (1911) に直接の靈感

を与え、また同じ国民主義的、精神主義的潮流に棹さして *Art and Swadesi* (1908), *Essays in National Idealism* (1909) といった著作をなしていたアナンダ・クーマラスワミーが、やがて天心没後のボストン美術館東洋部に招かれるにいたる経緯。さらには天心の提唱した東洋美術史という、いわば架空の構想が、追って一九二〇年代には、『北斎』(一九一八)の著者アンリ・フォションらの手によって、普遍的な世界美術史構想へと接ぎ木されてゆくのと裏腹に、日本では、続く世代の大村西崖、滝精一、伊東忠太といった学者たちによって、いわば親殺し同然に、天心の美術史家としての先駆性が否定されてゆく。このあたりの精神史再構築は、わずかに井上章一『法隆寺への精神史』が先鞭をつけているに止まる。

折からボストン美術館では『晩年のモネ』展、ニュー・ヨーク・ブルックリン美術館では『モードのジャポニスム』などが催されており、関係者と交渉をもつこともできた。北米の東洋美術蒐集を網羅的に訪ねる余裕は得なかったが、ロアンゼルス滞在で、カウンティー美術館心遠館で、ようやくジョー・プライス氏の収集の一端をかいま見る機会も得た。こうした訪問と並んで、当方の知見を披露する機会を頻繁にもてたのも幸いだった。コロンビア大学では、ヘンリー・スミス教

授の江戸・東京論ゼミに参加したほか、ドナルド・キーン・センター、美術史教室共催のかたちで二度の講演を行ない、十九世紀後半の、エドゥアール・マネ評価史と北米との関連や、日本における美術史という枠組みの近代における形成過程などを話題として取り上げた。これにはゾラ研究の権威、アンリ・ミットラン教授の臨席を賜り、その後のフランスでの研究のため、さまざまな便宜を計って戴けたのは有り難かった。またジョン・ローゼンフィールド教授に招待されて講演したハーヴァード大学、ライシャワー研究センターでは、Leo 欧風・リー、ハワード・ヒビット夫妻、入江昭夫妻はじめ、懐かしい方々との夕食会も忘れ難い。ローゼンフィールド先生が先の館長を勤めたフォッグ美術館付属図書館では、地下の大図書館・資料庫の威容に圧倒され、最上階に新設された修復工房の設備には羨望を禁じ得なかった。またパデュー大学、中西部日本文学研究会では招待講演で長沢光雄『AV女優』への書評の分析を試み、カリフォルニア大学ロサンジェルス校では、ミケレ・マラーラ教授主催になる日本近代の解釈学にかんする学会にも参加し、近代日本における美術史のカノン形成について発表、さらに北米から発つ前日には、ボストンのアジア研究協会年次会で先述の「岡倉天

心とアジア美術」などを発表した。ボストンでは日文研に着任早々、複数の発表をこなした渡辺雅子さんはじめ、事務職員の方々と合流できた。またいささか私事に属するが、源氏物語や芭蕉の研究で知られるハルオ・シラネ、鈴木登美夫妻、また木村汎先生ご夫妻はじめ、大学院生諸氏からも、何かにつけお世話戴いた。

三月からのフランス滞在中には、受け入れ先のパリ東洋語学学校、ジャン・ジャック・オリガス教授から格別のご配慮を賜り、また留学時代の指導主任・アンヌ・マリ・クリスタン教授の研究所でのセミナーに参加した。開館もない新国立図書館は、ストや突発事故などもあって、なお利用不如意だったが、オルセー美術館資料室、パリ日本文化センター図書室などで、合衆国で入手した資料の補完に努めた。また、初期の日本・中国美術蒐集が百年以上未公開で秘蔵されてきたパリ市立セルヌーシ美術館では、ミッシェル・モキユエル館員の助力を得て、予備的調査を行った。テオドル・デュレとともに一八七一年に来日したアンリ・セルヌーシの収集した日本・中国の美術品は、当時市場で入手可能だった同時代の工芸作品を無傷のまま保存しており、十九世紀後半のフランスにおける東洋美術観を復元するうえで貴重である。だ

がこの分野は、今日まで専門家からガラクタ同然に軽視されてきただけに、全容把握はなお困難であり、その精査は将来の課題だろう。

以上、努めて生真面目かつ無味乾燥に、研究の概要を述べてきたが、これら在外研修による研究成果の詳細は、本（一九九九）年秋に刊行の『絵画の東方』をはじめとした著作を通して順次公表してゆきたい。なおとりわけパリ滞在期間中は、一九九九年秋に予定される国際シンポジウム「文化の越境」準備の事務連絡や、それとも関連した編著『異文化理解の倫理にむけて』の編集に膨大な時間を取られ、本来の研修活動に少なからぬ支障を来したことを反省している。とはいえ、北米の有力大学の図書館の恩恵に今回初めて接した経験は貴重だった。コロンビア大学では、スター・東アジア図書館、美術史図書館、そして本館のあいだを右往左往して、深夜まで資料に当たっていると、毎日が飛ぶように過ぎて行った。帰国後、そのサーヴィスをもはや得ることが必ずしも容易ではないのに、半ば諦めの境地ながら、歯嚙みしている。一度限りの研修ではなく、海外からの最新の学術情報を継続して入手するには、どうすればよいのだろう。また活発な人的交流には、現場での臨機応変の対応が必要だが、研修以前に訪

問地をあらかじめ限定される現状では、せっかくの招待をお断りせねばならない場合も生じる。せめてヨーロッパ内部での移動、大西洋横断などの便宜を、より柔軟に認めて戴けないものか。最後に、研修中の公務にかかわる出費（ファックス支払など）は、予算執行上の困難は重々承知のうえだが、研修者の個人負担や、受け入れ側の機関に理不尽な迷惑とならぬような方策がなされるよう、なにがしかの配慮が得られることを期待したい。末筆ながら、研修の間、留守中様々なご迷惑をお掛けした皆様に深く御礼申し上げます。

外国人客員研究員の先生方との3年間

奥野 由樹子

平成九年度から日文研の外国人客員研究員受け入れ業務を担当し始めて、早くも三年が過ぎようとしています。一五名の定員枠と数名のCOE枠で三ヶ月から一年の期間滞在される外国人客員研究員は、毎年度延べ約三十名にのぼります。国籍、専門分野もさまざまな先生方の受入業務を通して、ず

いぶん多くの経験・勉強をさせていただきました。

日文研が平成九年度から十一年度までの三年間に受け入れた外国人客員研究員について、下記のとおり、簡単にデータをまとめてみました。併せて、私個人の印象や感想を述べさせていただきます。と思います。

まず、年度別人数（新規招へい者数）ですが、九年度二十名、十年度二五名、十一年度十五名と、年度により大きな変化があることがわかります。ただし、前年度から滞在中の研究者もおられますので、「年度内在籍者延べ」人数は若干変化が少なくなっています。過去三年間を平均すると、毎年約二十名の客員研究員を迎えており、前年度から合わせた年間延べ人数は約三十名となります。十一年度の人数は十月現在で予定の数字ですが、この時点で着任直前に二名の辞退者があったことが、人数減に影響しています。本務の大学で急に重要な職務を負われた等の理由です。近い将来、再度招へいできることを願っています。また、十年度の人数増加の一因は、滞在期間の半年未満が十名と多かったこともあるでしょう。

招へい期間については、一年間滞在の人数は、ほぼ毎年十名です。外国と日本との学年年度の違いは常に問題となって